

厚生労働科学研究費補助金
新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業
子宮頸がんワクチン接種後に生じた症状に関する治療法の確立と情報提供についての研究
平成 29 年度 分担研究報告書

東北大学病院神経内科における診療実態

研究分担者 青木 正志 東北大学大学院医学系研究科 教授

研究要旨

【目的】平成 29 年度における東北大学病院神経内科における子宮頸がんワクチン接種後の神経障害が疑われた患者の診療実績を調査する。またその病態を検索する。

【方法】上期間内に当科へ紹介となった子宮頸がんワクチン接種後の神経障害が疑いの患者は 1 名であった。

【結果】平成 27 年度は 4 名の症例が外来受診された。平成 28 年度も 4 名が外来を受診されたが、平成 29 年度は 1 名であった。いずれも神経学的所見では明らかな異常は指摘できない。

【結語】継続して注意深い診療をしていく必要がある。

A. 研究目的

平成27年4月から「子宮頸がんワクチン接種後の神経障害に関する治療法の確立と情報提供についての研究班」(池田班)に参加をして、当院婦人科と共にヒトパピローマウイルス感染症の予防接種後に生じた症状の診療に係る協力医療機関となった。平成29年度の東北大学病院神経内科における子宮頸がんワクチン接種後の神経障害が疑われた患者の診療実績を調査する。また本病態の成因を検索する。

患者血清中の脳炎関連自己抗体を検出するためのELISAを用いたシステムを構築中であるが、採血や脳脊髄液検査の希望なし。

D. 考察

平成27年度は4名の症例が外来受診された。平成28年度も4名が外来を受診されたが、平成29年度は1名であった。いずれも神経学的所見では明らかな異常は指摘できない。また採血や脳脊髄液検査の希望なし。

B. 研究方法

平成28年1月1日から同年12月31日に当科へ紹介となった子宮頸がんワクチン接種後の神経障害が疑いの患者は1名であった。

E. 結論

継続して注意深い診療をしていく必要がある。

(倫理面への配慮)

患者個人情報取り扱いに関しては匿名化を行っている。

F. 健康危険情報

なし。

C. 研究結果

症例

17歳女性、12歳時に喘息で2か月の入院、以降食意不振および全身倦怠感があり、小児心身症の診断を受ける。その後ワクチン接種。2回目の接種の2か月後から意識消失発作が出現、3年前からは手足の痛みが出現し、全身に拡大し、臍以下の感覚脱失も伴うようになる。他院でワクチンとの関連が疑われ、mPSLパルス療法を2クール施行するも効果なし。他の神経疾患の可能性を疑われ当科へ紹介となる。神経学的所見および症状は短時間で変動し、再現性に乏しい。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

該当なし